

名古屋東山周辺の昆虫相

I. 概 論

内 藤 通 孝*

Insect Fauna around Higashiyama in Nagoya

I. General Considerations

Michitaka NAITO

はじめに

名古屋市の東部丘陵地帯には、市内には珍しく、里山的自然がまだ所々に残されている。筆者は約50年にわたって八事界隈で生活しているが、その間、周辺の状況は大きく変貌し、急速に都市化した。にもかかわらず、東山公園（千種区）とその周囲、八事山興正寺（昭和区）の辺り等には里山としての自然が残されている。この50年間の急速な都市化、およびおそらく全地球的な規模での温暖化の一部分現象として、確かに昆虫相の変化がみられる。

本論では、名古屋市東部丘陵地帯、とくに東山公園や興正寺およびそれらの周辺での昆虫相の特徴とその変遷について、いくつかの種に注目して、その概要を述べる。

1. 直 翅 目

バッタ科では、成虫で越冬するツチイナゴ、キリギリス科では、その鳴き声が季節の指標となるクビキリギリス（成虫で越冬することにも注目）、ヤブキリ、キリギリスについて述べる。コオロギ科では、帰化昆虫のアオマツムシの動向に注目したい。

ツチイナゴ *Patanga japonica* は、幼虫期は8月頃からで、10月下旬に羽化し、そのまま越冬して翌年の夏に産卵する。草原に住むが、クズ等がよく茂り、地表部が覆い尽くされて光がささないような環境を好む。イネ科植物よりもクズを好んで食べる^{1, 2)}。九州以北に分布するバッタでは唯一、成虫で冬を越す²⁾。東山公園などのクズの茂る草地によく見られる（写真1）。

ヤブキリ *Tettigonia orientalis* は、6月下旬から樹上で「シリシリシリ……」と長く連続して鳴く。若い幼虫は草食性、成長するにつれて肉食性が強くなる¹⁾。また小さいうちは

* 生活科学部 食品栄養学科

キク科の花の花粉なども食べる（写真2）。里山的環境のみでなく、市街地の樹上でも鳴き声が聞かれる。キリギリス *Gampsocleis burgeri*（写真3）もヤブキリとほぼ同時期に鳴き始め、季節の指標となる虫である。

クビキリギリス *Euconocephalus thunbergi*（写真4）は、4月頃から暖かい夜に「ジー」と、蛍光灯の唸り（昨今では聞かれなくなった）に似た連続した声で鳴く。急に気温の上があった春の暖かい、風のない夜に初鳴きが聞かれる³⁾。東南アジアにも分布する熱帯性の昆虫である。6月頃、草の茎に産卵し、9月に成虫になるというが⁴⁾、東山公園などの自然状態での正確な羽化の時期は確認していない。8月に孵化するとされ、東山公園などでも8月から幼虫が見られる。

アオマツムシ *Calyptotrypus hibinonis*（写真5）は、8月から10月にかけて、街路樹等の樹上で、「リーリー」と甲高い声で連続して鳴く。1898年（異説によれば1912年）に初めて東京都区内（麻布、青山といった中心部あるいは山手）に出現して、そこから周辺に広がった⁵⁾。現存する最古の標本は、1916年に採集されて原記載に用いられたものである⁵⁾。中国原産といわれ、1940年頃に東京や大阪などの都会での記録はあったが、分布が拡大したのは1970年代の後半である⁶⁾。鳴く虫の仲間では数少ない樹上生活をする種で、卵も枝に産み込むため緑化木などに伴って都市周辺に分布を広げた。最近では韓国にも入ったらしい⁵⁾。愛知県と静岡県では1943年以前から記録されているが、1980年頃から急速に分布域を拡大したようである。名古屋周辺から高速道路などの幹線道路沿いに分布が広がり、数年のうちに半島部や山間地の一部を残して県下全域に広がった。最近では東海地方の生息密度は他地域より高いようである⁶⁾。『愛知県の昆虫(下)』⁷⁾によると、既知産地は東三河（1982～1985）、西三河（1976～1985）、名古屋（1980～1984）、尾張（1977～1985）、標本は東三河（1981）、西三河（1982）、名古屋（1981）、尾張（1980）となっている。これらの記録された年代からも、愛知県内でアオマツムシが注目されるようになったのは1980年前後からであることがわかる。

2. ナナフシ目

タイワントビナナフシ *Sipylodea sipylus* は、単為生殖し、♂は飼育下での1例のみが知られているだけで、野外では未知である^{2, 8)}。分布は本州（神奈川県以西）、九州、対馬、南西諸島となっており、本州では原則として年1化、南西諸島では周年発生と考えられている²⁾。『愛知県の昆虫(上)』⁹⁾では、既知産地は東三河（東栄町）、尾張（瀬戸）のみで、名古屋市からの記録はない。また、標本の記載はない。筆者は本学の星が丘キャンパス内で採集された標本を保管している。

タイワントビナナフシ *Sipylodea sipylus* 1♀, 千種区星が丘元町, 24. X. 2004 加賀谷みえ子採集（写真6）

（採集地名の名古屋市は全て省略する。また、採集者名、写真撮影者名等の記載がないものは、全て筆者による。）

これが自然のものか、植木などについて運ばれたものか不明であったが、近隣には生息

している記録があるので、自然状態で生息している可能性があると考えていた。最近、東山公園において、ススキの葉に静止しているタイワントビナナフシの幼虫を採集し、自然下での生息を確認した。

タイワントビナナフシ *Sipylodea sipylus* 1♀ (終齢幼虫), 千種区田代町東山公園, 26. VIII. 2006

ナナフシモドキ *Baculum irregulariterdentatum* (写真7) は単為生殖をし、野外産の雄は1990年になって発見された。年1化で、成虫は6～7月頃から出現し、11月頃まで見られる。分布は、本州(宮城県・新潟県以西)、四国、九州、佐渡、対馬となっている²⁾。上記のタイワントビナナフシと異なり、飼育下では暑さに弱く、南方系の種とは考えにくい。『愛知県の昆虫(上)』では、既知産地、標本に名古屋の記載はない。東山公園や興正寺では普通に見られる。

この虫の命名については、過去に混乱があり、古い文献10と11にはナナフシ *Phraortes elongatus* として、ナナフシモドキ *Baculum irregulariterdentatum* が図示されている。さらに古い文献12では、ナナフシ *Phraortes elongatus* として図示されているのは、エダナナフシ *Phraortes illepidus* である。結局、当初ナナフシ *Phraortes elongatus* とされたものはナナフシモドキ *Baculum irregulariterdentatum* であり、日本にはナナフシという和名の虫が存在しないことになってしまった。しかし、普通にいるナナフシがナナフシモドキではしっくり来ないので、*Baculum irregulariterdentatum* の和名を再度ナナフシとすることを提案したい。

3. 同 翅 目

筆者の幼少時の昭和区付近では、ニイニゼミ *Platypleura kaempferi* が最も多く、アブラゼミ *Graptosaltria nigrofuscata* は少なかった。当時の子供達は、林の中で樹上高い所にとまっているセミを鳥モチで捕まえていた。ニイニゼミが主体で、アブラゼミを捕まえると友達に自慢できた。ましてや、クマゼミ *Cryptotympana facialis* は高嶺の花であった。私の標本箱には、1966年の札がついたクマゼミの標本が後生大事に標本箱に眠っている。

クマゼミ *Cryptotympana facialis* 1♂, 昭和区, 17. VIII. 1966

現在ではごくありふれたクマゼミも当時の子供達の間では極めて貴重であった。小学校1年あるいは2年生のときだったか、知多半島の内海に家族で海水浴に出かけた。当時、そこではクマゼミがよく鳴いており、あこがれのクマゼミを採ることができた。ところが、帰りに大事な標本を忘れて来て、大変悔しい思いをしたことを今でも覚えている。

しかし、その後、ニイニゼミは八事一帯の都市化とともに減少し、代わってアブラゼミが優勢となった。さらに、最近では、クマゼミがアブラゼミを凌ぐ勢いになってきた。これらセミの盛衰には、都市化、温暖化、乾燥化といった変化が大きく関与していると考えられる。クマゼミの勢力圏の拡大とニイニゼミの減少は全国的に見られる現象であ

り、多くの文献で指摘されている^{2,6)}。ツクツクボウシも都市公園など乾燥した手入れの行き届いた場所では少なくなっている。東山公園や興正寺では今でもその鳴き声を楽しむことができるが、以前は観察された鶴舞公園では、最近では鳴き声が聞かれない。

2006年は、前年末から続いた厳冬で始まり、その後も不順な天候が続いたが、梅雨明け発表（7月30日）前後から一転猛暑となった（実際は、梅雨明け前の6月27日以降、30℃を超える日がかなりあった）。名古屋地方気象台は2006年7月22日正午現在、アブラゼミの初鳴きを観測しておらず、平成に入ってからもっとも遅いと発表した¹³⁾。しかし、これは気象台での観察に問題がありそうである。東山周辺の私の観察では、クマゼミは7月10日、アブラゼミは7月16日に初鳴きを聞いている。確かに、アブラゼミとクマゼミの大合唱が聞かれるようになったのは例年より遅れた感はあるが、初鳴きが例年に比べて極端に遅いことはなかった（1987～2006年の平均は、アブラゼミ、クマゼミともに7月12日。文献14と15の資料に2004年以降の記録を追加して算出した）。名古屋地方気象台（千種区）では、職員が気象台とその周辺で聞いたセミの声を記録上の観測としているとのことであるが、気象台付近だけの観察では、初鳴きを実際より遅く、また、終鳴を実際より早く判定する可能性がある。事実、鶴舞公園もクマゼミとアブラゼミの名所であるが、興正寺や東山公園のような里山的自然の残る地に比べて、短期集中型でいっせいに鳴き出し、早くに終了する。気象台の記録は都市公園的な場所における結果と解釈すべきであろう。また、初鳴きが遅れている理由として、名和哲夫（名和昆虫博物館）は、今年（2006年）のセミを産んだ親ゼミ、さらにその7年前の祖父母のセミに着目し、世代間連鎖の可能性を指摘している。しかし、これは大きな誤解である。佐藤隼夫（後出）の実験記録による出現周期は満6年であり、7年目に出現するということである。佐藤の結果が正しいとすると、今年出現したアブラゼミの親は、6年前（2000年）に出現したものであることになる。すなわち、産卵されたアブラゼミの卵はそのまま越冬した後、翌年の夏に孵化して土中に潜るので、卵期間1年、幼虫期間5年で、産卵6年後（7年目）に羽化するという意味であり、全生活史は6年ということになる。この点については、専門書にも誤解が散見される。産卵されて7年目に成虫が羽化することが確定した事実のように取り扱っているもの²⁾、幼虫期間と出現間隔を取り違えているもの¹⁶⁾もある。しかも、6年ごとの出現というのもそれほど確かなことではない。そもそも、アブラゼミが7年目に出現するという多くの書物における記載の根拠は、佐藤隼夫（東北大学）が1933年に大掛かりな野外飼育室に樹木を植え、アブラゼミ208匹とミンミンゼミ123匹を放して実験した結果に基づいている¹⁷⁾。佐藤は6年後の1939年に、ようやくアブラゼミとミンミンゼミの成虫を確認した。ただし、この結果は各1匹のみであり、きわめて幸運であったとともに、成功率の異常な低さには疑問が残る。最近では、村山壮五¹⁸⁾は、大掛かりな実験室を用いず、アロエを用いた飼育装置で実験的研究を行い、生育環境によって幼虫期間は大きく変動することを示した。すなわち、アブラゼミ、ミンミンゼミともに、幼虫期間は2～5年と変動することが示されている¹⁷⁾。昭和区の医師、能登正嗣¹⁹⁾は、自宅の庭での観察からセミ（文脈からアブラゼミのこと）の生活史は今まで言われてきたよりもずっと短い3年程度ではないかと指摘している。まさに慧眼である。

過去には千種区などでミンミンゼミ *Oncotympana maculaticollis* の鳴き声が聞かれたが、近年はまったく記録がないという¹⁾。『愛知県の昆虫(上)』では、県内産地に名古屋市とあ

るが、標本等の記載はない。東日本では平地に普通であるが、西南日本では主に低山地から山地の湿った林に生息している。中部地方では山地や半島の先にしか分布していないとされている⁶⁾。内藤と団野²⁰⁾は、1997年に、平和公園（8月9日）と興正寺（8月16日）にミンミンゼミの鳴き声を聞いたことを報告した。下山²¹⁾は、この報告に触発されて、1997年の8月14日に興正寺でミンミンゼミの鳴き声を聞いたと追加報告をしている。同報告文では、興正寺でヒグラシ *Tanna japonensis* の鳴き声も聞かれたとあるが、これは誤報と考えられる。筆者は興正寺の周辺に50年近く居住しているが、ヒグラシの鳴き声を聞いたことはなく、個体あるいは脱皮殻を確認したこともない。『愛知県の昆虫(上)』にも名古屋市におけるヒグラシの記録はない。名古屋地方気象台周辺の観測では、ヒグラシの鳴き声は1985年までは聞かれたことがあるというが定かでない。

現在までの名古屋市におけるミンミンゼミ確認の記録は以下のようである。

観察日時	場所	観察者	観察事項	文献
1997年8月9日6:00頃	千種区平和公園	団野	鳴き声、捕獲	20
1997年8月14日10:00頃	昭和区八事本町興正寺	下山	鳴き声	21
1997年8月16日18:00頃	昭和区滝川町	内藤	鳴き声	20
2003年9月8日12:40	千種区星が丘元町	内藤・福智	鳴き声	15
2005年8月30日9:18	千種区東山公園	内藤	鳴き声	未発表

上記の記録は、いずれも名古屋市付近におけるセミの活動期の後半に集中しており、時刻は午前中に多い。出現期は7月下旬～9月下旬（8月に多い）あるいは7月下旬～10月にみられ、特に夏後半に多いとある成書の記述^{2, 16)}に一致する。また、時刻についても午前中～日中にかけてとあるのに一致している。

ミンミンゼミについても、アブラゼミと同様な幼虫期間、出現間隔についての誤解が見受けられる^{2, 16)}。幼虫期間はアブラゼミと同じく2～5年である¹⁷⁾。

チツチゼミ *Cicadetta radiator* は、9・10月に天白区平針、千種区平和公園の松林で見られるとある¹⁾。以前は興正寺の林で鳴き声が聞かれたこともあるが、ここ数年は観察できていない。以下の脱皮殻を同地で採集しており、実際に興正寺で発生していたことは確かである。東山公園では毎年、鳴き声を観察している。『愛知県の昆虫(上)』では、県内産地に名古屋市とあるが、標本等の記載はない。

チツチゼミ脱皮殻 1 ex., 昭和区八事本町興正寺, 18. IX. 1993

ハルゼミ *Terpnosia vacua* は市東部丘陵地（天白区八事裏山など）で、4月下旬～6月の晴れた日に、日当たりのよい松林でよく鳴く（マツゼミともいう）と記載があるが¹⁾、筆者は東山公園や興正寺周辺では確認できていない。『愛知県の昆虫(上)』では、県内産地はほぼ全域となっているが、具体的記載はない。

東山公園や興正寺でこれらのセミの鳴き声があまり聞かれないのは、マツの木が少ないことと関連があるかもしれない。

4. 異 翅 目

カメムシも南方系と考えられる種の進出が見られる。ここでは、最近目立つウシカメムシ、ヨコヅナサシガメ、オオキンカメムシについて述べる。

ウシカメムシ *Alcimocoris japonensis* (写真 8) は、『東海 虫の歳時記』⁴⁾によると、豊川市財賀寺、新城市船着山など数ヵ所しか産地がわかっていないとされている。『愛知県の昆虫(上)』によると、既知産地および標本の存在は東三河・西三河のみであり、尾張・名古屋の記載はない。世界的には、中国・台湾から韓国済州島・日本となっている。本州は太平洋側を茨城県まで、日本海側を福井県まで北上し、暖流が影響する暖かい沿岸地方に限られる。1月の平均気温が2℃の等温線より寒い地方には生息していないという。また、年2化以上の可能性が高いと報告されている²²⁾。筆者は以下の標本を保管している。

ウシカメムシ *Alcimocoris japonensis* 3 exs., 昭和区滝川町, 5. IX. 1999; 11. IX. 1999; 2. VI. 2002

ヨコヅナサシガメ *Agriosphodrus dohrni* (写真 9) は、神社や公園などの人里的な環境の、サクラやエノキの樹幹に発見されることが多く、都市部の公園などでもしばしば見出される。東日本に向け、分布圏を広げつつある。分布は、本州(中部以西)、四国、九州の他、中国、東南アジアとなっている²³⁾。『愛知県の昆虫(上)』によると、既知産地・標本は西三河(豊田市)となっているが、最近は普通に見られる。筆者の手元のある標本で一番古いものは、1996年のものである。

ヨコヅナサシガメ *Agriosphodrus dohrni* 2 exs., 昭和区滝川町, 25. X. 1996; 26. X. 1996

オオキンカメムシ *Eucorysses grandis* は、光沢のある赤橙色の大型のカメムシで、本来は南方系の種である。わが国では、関東以南の海岸地域から南西諸島までの照葉樹林に生活しており、成虫で越冬する。国外では、台湾、中国、東洋区となっている²³⁾。名古屋市内では、守山区小幡(1980)、瑞穂区山崎川岸(1942)での記録がある⁹⁾。筆者も1999年の1月10日に昭和区八事本町の興正寺林で記録しており、同地で越冬していた可能性を指摘した²⁴⁾。生息地は三重県大王崎など太平洋岸沿いにあり、そこから飛来した可能性が指摘されている¹⁾。移動性はかなり強いようで、北海道や東北でも採集された記録がある²³⁾。

5. 鱗 翅 目

蝶類では、モンキアゲハ、クロコノマチョウ、ツマグロヒョウモンのような南方系の種類の進出が著しい。

モンキアゲハ *Papilio helenus nicconicolens* は、国内では、本州(関東地方以西の暖地)、四国、九州、南西諸島に、国外では東洋熱帯に広く分布している²⁵⁾。南方系の蝶で、第二次世界大戦後、愛知県内でも急速に分布を広げ、『愛知県の昆虫(下)』によると、現在では

海岸の林から山間部に至るまで広く生息している。『なごやの昆虫』によると、以前は名古屋市ではあまり見られなかったが、最近は少しずつ個体数や生息地が増加している。筆者も以下の記録以来、東山周辺で何度も目撃している。

モンキアゲハ *Papilio helenus nicconicolens* 1♂, 名東区藤巻町, 1. IX. 2003 (写真10)

クロコノマチョウ *Melanitis phedima oitensis* は、『なごやの昆虫』では、市内では定着しているか不明としていた。その後、『昆虫の観察』では、毎年のように確認されているが、南方系の蝶で、世代を重ねながら北上し、秋期に見られる場合が多く、近年になって土着が確実に増えてきたとしている。成虫で越冬し、繁殖した個体が夏と秋にみられる。愛知県では1970年代後半から定着のきざしが見られるようになり、豊橋市付近では1980年に多数の繁殖が確認されて以来、厳しい冬を耐え抜き、徐々に定着してきたという⁶⁾。わが国での分布は、本州（山梨県南部から静岡県以西）、四国、九州、沖縄諸島までの島嶼となっているが、東南アジアの亜熱帯から西南日本の暖帯にかけて広く分布している²⁵⁾。『愛知県の昆虫(下)』によると、東三河、西三河、名古屋市ではほぼ毎年確認されているが、尾張北部では採集報告が少ない。また、夏型は秋型に比べて最終報告が少ない。林内では、落ち葉等に紛れて保護色で発見しづらいが、筆者も、東山公園、興正寺等で最近はいしばしば目撃している。春には、越冬して翅がボロボロになった個体が観察される（写真11）。

ツマグロヒョウモン *Argyreus hyperbius hyperbius* (写真12) は、『昆虫の観察』によると、毎年のように確認されているが、南方系の蝶で、世代を重ねながら北上し、秋期に見られる場合が多く、近年になって土着が確実に増えてきた。クロコノマチョウより約10年遅れて定着するようになったという。日本の南西部から徐々に北上しながら定着し、1990年代に入ると愛知県西部で記録が増すようになり、数年後に県内の広範囲で発見されるようになった⁶⁾。国内での分布は、本州（東海から近畿以西）、四国、九州、南西諸島となっている²⁵⁾。『愛知県の昆虫(下)』によると、県内では散発的な記録があり、既知産地として名古屋（北区）があげられているが、標本の記載はない。国外ではアフリカ北東部から東洋区の熱帯、亜熱帯地域を経てニューギニア、オーストラリアに至る広い地域に分布している²⁵⁾。1992年に名古屋昆虫館が行った調査では、名古屋市内6ヵ所で確認されたという²⁶⁾。筆者の手元には、

ツマグロヒョウモン *Argyreus hyperbius hyperbius* 1♀, 緑区大高緑地公園, 23. IX. 1996
の標本がある。

6. 膜翅目

東山公園や興正寺の林には、スズメバチが多く、毎年、秋になると襲われる人が後を絶たない。オオスズメバチ *Vespa mandarinia japonica*, キイロスズメバチ *Vespa simillima*, コガタスズメバチ *Vespa analis*, モンスズメバチ *Vespa crabro flavofasciata*, ヒメスズメバチ *Vespa tropica*, クロスズメバチ *Vespa flavisepts lewisii* 等が見られるが、特に注目されるのはチャイロスズメバチ *Vespa dybowskii* である。

チャイロスズメバチ（写真13）は全身が黒く、キイロスズメバチなど他のスズメバチとは体色が全く異なっている。チャイロスズメバチの女王蜂は自分で巣をつくる能力も有するが、ときによってキイロスズメバチやモンスズメバチ等、他のスズメバチの巣を乗っ取る。チャイロスズメバチの女王蜂は単独でそれらの巣に侵入し、相手の女王蜂を殺して巣を乗っ取り、残った相手の働き蜂に巣づくりや餌集めをさせる。前の女王蜂が産んだ卵や幼虫は、働き蜂として羽化するまで育児が続けられるので、しばらくの間は乗っ取りにあったスズメバチの働き蜂だけが羽化してくる。女王蜂の交代後に産みつけられた卵はすべてチャイロスズメバチの働き蜂となる。その後は両種の混成が見られるが、最後にはチャイロスズメバチの働き蜂だけとなり、自分達だけで巣を完成し、新女王蜂や雄蜂を育てる²⁷⁾。

他の蜂や同じスズメバチ仲間に対して、武力で乗っ取りを行う種に共通する攻撃手段は、太くて硬い毒針、強力な大顎、体表面の硬化などによる完全武装である。とくにチャイロスズメバチは、並外れた攻撃性に加えて、ほかのスズメバチには見られないほどの表皮のキチン化が進んでいる²⁷⁾。

チャイロスズメバチは北海道、本州の中部から関東に分布するが、産地は限られ、個体数は少ないとされていた。長野を中心に中部山地に点在しているが、めったにその姿はみられず、ハチに慣れ親しんでいる長野の人でも出会った人は稀という状況であったという²⁷⁾。

ところが、1992年、1995年、2000年と、この「幻のチャイロスズメバチ」が名古屋市内で発見され、それまで伊那谷（長野県）が南限と考えられていた定説が覆されることとなった²⁸⁻³¹⁾。その後もチャイロスズメバチ確認の記録は以下のように増加しており、このハチの意外な生命力が明らかになりつつある。

1992年 9月中旬 千種区田代町東山公園（設置された鳥の巣箱中） 営巣確認 モンスズメバチ巣乗っ取り（名古屋市防疫センター）

1995年 7月 千種区市動物愛護センター 女王蜂捕獲（名古屋市生活衛生センター）

2000年 9月25日 名東区藤巻町（民家倉庫壁） 営巣確認 モンスズメバチ巣乗っ取り（名古屋市生活衛生センター）

2001年 8月12日 三重県嬉野町 三重県科学技術振興センター 営巣確認 モンスズメバチの巣乗っ取り³²⁾

2005年 10月 岐阜県八百津町民家軒下 営巣確認（西尾亮平）³³⁾

これらの記録からは、乗っ取られた巣はモンスズメバチのものが多くいようである。筆者は2003年以来、以下のように東山周辺でチャイロスズメバチを観察している。

2003年 5月10日～9月23日 昭和区八事本町興正寺³⁴⁾

2004年 8月 6日 名東区藤巻町

2006年 8月15日 千種区田代町東山公園

2006年 8月20日 昭和区八事本町興正寺

2003年には、5月から9月まで継続的に興正寺の林でチャイロスズメバチが観察されたことから、その近辺で営巣していた可能性が高い。2005年は全く観察されなかったのが心配されたが、2006年には再び観察された。

7. 鞘翅（甲虫）目

甲虫の仲間では、アオドウガネとドウガネブイブイの消長に興味を持たれる。アオドウガネ *Anomala albopilosa* は、西日本ではごく普通の種であるが、少し前まで名古屋市内でその姿を見ることはなかった。『愛知県の昆虫(上)』にも、既知産地が東三河、尾張（春日井市、知多市）とだけあり、名古屋市の記載はない。名古屋市内においては、筆者が1986年に採集している³⁵⁾。最近、東京都区内で増えており、酒井³⁶⁾は、アジサイの葉を食害し、加害は特定の株に集中する傾向があることを指摘している。東京都内における記録も1986年が最初である³⁷⁾。近年、アオドウガネの勢力拡大に歩調を合わせるように、以前は都内のどこにでもたくさんいたドウガネブイブイ *Anomala cuprea* の姿をみるものがほとんどなくなっており、この2種の発生状況の変遷は、都市化、温暖化などが影響していると推察している。名古屋市内においてもほぼ同時期にアオドウガネが勢力を拡大し、ドウガネブイブイが衰退した。東京都区内と同様な事情が考えられよう。また、筆者もアジサイの葉を多数のアオドウガネが加害するのを観察している（写真14）。アオドウガネの分布が、本州、四国、九州、対馬、屋久島、黒島、口永良部島、トカラ中之島、済州島、朝鮮半島となっているのに対し、ドウガネブイブイは、北海道、本州、四国、九州、種子島、屋久島、対馬、朝鮮半島、中国北東部、シベリア東部、千島³⁸⁾であり、アオドウガネのほうが、温暖化に適応した種であると考えられ、この2種の勢力関係には興味深いものがある。

ウバタマムシ *Chalcophora japonica* は、銅色でタマムシの雌などといわれたが、全くの別種である。わが国での分布は本州から南は琉球、南大東島、小笠原、外国では朝鮮半島、中国、台湾、インドシナ半島³⁹⁾となっているので、本来、南方系の種と考えられ、成虫で越冬する習性を有すると考えられる。暖地では成虫越冬するが、名古屋地方では最近まで未確認であった¹⁾。筆者は名古屋市昭和区での成長越冬を確認した⁴⁰⁾。

ま と め

名古屋市東部丘陵地帯、とくに東山公園、八事山興正寺周辺の里山的自然における昆虫相を、いくつかの種に着目して、ここ数十年の盛衰を概括した。

その要点は、①アオマツムシの消長、②クマゼミの増加とニイニイゼミ、ツクツクボウシの衰退、③ミンミンゼミの再発見、④ウシカメムシ、オオキンカメムシ、ヨコヅナサシガメ等の南方系カメムシの進出、⑤モンキアゲハ、クロコノマチョウ、ツマグロヒョウモン等の南方系チョウの進出、⑥チャイロスズメバチの動向、⑦アオドウガネとドウガネブイブイの勢力関係、等である。このうち、②、④、⑤、⑦には温暖化、乾燥化、都市化といった変化の関与が大きいと考えられる。

文 献

- 1) 白田明正, 岡田正哉, 穂積俊文, 安藤尚, 蟹江昇: なごやの昆虫 名古屋昆虫館 1989
- 2) 宮武頼夫, 加納幸嗣: 検索入門 セミ・バッタ 保育社 1992
- 3) 内藤通孝: 名古屋市におけるクビキリギスの初鳴き 月刊むし 232: 37, 1990
- 4) 大平仁夫: 東海 虫の歳時記 1990 (自費出版)
- 5) 市川顕彦: 青・松虫今昔物語——帰化昆虫アオマツムシの謎—— 月刊むし 425: 21-28, 2006
- 6) 愛知県: 昆虫の観察——自然に親しむために 愛知県環境部自然環境保全室 1998
- 7) 愛知県昆虫分布研究会: 愛知県の昆虫(下) 愛知県 1991
- 8) 岡田正哉: ナナフシのすべて トンボ出版 1999
- 9) 愛知県昆虫分布研究会: 愛知県の昆虫(上) 愛知県 1990
- 10) 黒沢良彦, 日高敏隆編: 原色昆虫百科図鑑 小学館 1967
- 11) 学研生物図鑑 昆虫Ⅲ バッタ・ハチ・セミ・トンボほか 学習研究社 1983
- 12) 竹内吉蔵: 原色日本昆虫図鑑(下) 保育社 1955
- 13) セミの初鳴き「まだ」 気象台未確認 平成で最も遅く 2006年7月22日 中日新聞夕刊
- 14) 内藤通孝: セミの発音活動に対する異常気象の影響について 月刊むし 286: 8-9, 1994
- 15) 内藤通孝, 福智喜子: セミの発音活動に対する異常気象の影響について(2) 月刊むし 394: 23, 2003
- 16) 日本産幼虫図鑑 学習研究社 2005
- 17) 中尾舜一: セミの自然誌 鳴き声に聞く種分化のドラマ 中央公論社 1990
- 18) 村山壮五: セミの飼育 昆虫と自然 23(9): 17-20, 1988
- 19) 能登正嗣: セミの生活史 愛知保険医新聞第1345・6合併号 2000年8月5・15日
- 20) 内藤通孝, 団野和久: 名古屋市におけるミンミンゼミの記録 月刊むし 322: 8, 1997
- 21) 下山良平: 名古屋市のミンミンゼミの追加記録 月刊むし 325: 44, 1998
- 22) 桂孝次郎, 奥野晴三, 山本博子: 韮公園の自然——都市の自然への招待—— 韮公園自然探究グループ 1993
- 23) 安永智秀, 高井幹夫, 山下泉, 川村満, 川澤哲夫: 日本原色カメムシ図鑑——陸生カメムシ類—— 全国農村教育協会 1993
- 24) 内藤通孝: 名古屋市で冬季にオオキンカメムシを採集 月刊むし 344: 42, 1999
- 25) 猪又敏男: 原色蝶類検索図鑑 北隆館 1990
- 26) 暖冬——昆虫の世界「異常あり」 ナゴヤに新顔定住 カメムシやチョウなど 80-90年代に変化 中日新聞 1998年6月9日
- 27) 松浦誠: スズメバチはなぜ刺すか 北海道大学図書刊行会 1988
- 28) 名古屋にいた 長野県が南限の「チャイロスズメバチ」 東山公園で営巣 中日新聞夕刊 1992年11月14日
- 29) チャイロスズメバチ 名古屋に巣 天然記念物級の希少種 南限説変更も 中日新聞 2000年10月22日
- 30) 幻のスズメバチ名古屋に生息 市職員チャイロスズメバチ3度確認 「伊那谷南限」定説覆す 読売新聞 2001年5月10日
- 31) 珍虫チャイロスズメバチ名古屋に 衛生センター採取 「南限分布」を塗り替えか 朝日新聞夕刊 2001年5月12日
- 32) チャイロスズメバチ 名古屋から南限下がる? 三重嬉野で営巣確認 中日新聞 2001年8月12日

- 33) 希少種チャイロスズメバチ「幻」の巣軒下に 岐阜・八百津で確認 生態解明へ専門家注目 中日新聞 2005年10月22日
- 34) 内藤通孝：名古屋市におけるチャイロスズメバチの記録 月刊むし 397: 43, 2004
- 35) 内藤通孝：名古屋市におけるコガネムシ科の追加記録 月刊むし 226: 17-18, 1989
- 36) 酒井香：都内におけるアオドウガネの記録 鯉角通信 8: 44, 2004
- 37) 榎戸良裕：東京都におけるアオドウガネの採集記録 *Lamellicornia* 2: 57, 1986
- 38) 上野俊一, 黒澤俊彦, 佐藤正孝編著：原色日本甲虫図鑑(II) 保育社 1985
- 39) 黒澤良彦, 久松定成, 佐々治寛之編著：原色日本甲虫図鑑(III) 保育社 1985
- 40) 内藤通孝：愛知県でウバタマムシの成虫越冬を確認 月刊むし 209: 39, 1988

写 真

1. ツチイナゴ *Patanga japonica*：名東区藤巻町, 29. VIII. 2006, クズの葉上にとまっている幼虫.
2. ヤブキリ *Tettigonia orientalis*：昭和区八事本町興正寺, 21. IV. 2006, タンポポの花粉を食べる幼虫.
3. キリギリス *Gampsocleis burgeri*：昭和区八事本町興正寺, 10. VIII. 2003.
4. クビキリギス *Euconocephalus thunbergi*：昭和区滝川町, 18. V. 2003. 越冬後の成虫♂.
5. アオマツムシ *Calyptotrypus hibinonis*：昭和区八事本町興正寺, 11. IX. 2005.
6. タイワントビナナフシ *Sipyloidea sipyilus*
7. ナナフシモドキ *Baculum irregulariterdentatum*：千種区田代町東山公園, 18. VIII. 2006.
8. ウシカメムシ *Alcimocoris japonensis*：昭和区八事本町興正寺, 3. XI. 2004.
9. ヨコヅナサシガメ *Agriosphodrus dohrni*：昭和区八事本町興正寺, 22. IX. 2002. 集団でヨツボシケシキスイ *Librodor japonicus* を襲う幼虫.
10. モンキアゲハ *Papilio helenus nicconicolens*：水溜りに吸水に来た♂.
11. クロコノマチョウ *Melanitis phedima oitensis*：昭和区八事本町興正寺, 30. IV. 2006. 成虫で越冬し, 翅がボロボロになった♀.
12. ツマグロヒョウモン *Argyreus hyperbius hyperbius*：昭和区八事本町興正寺, 26. X. 2003. ♀.
13. チャイロスズメバチ *Vespa dybowskii*：昭和区八事本町興正寺, 3. VIII. 2003. 樹液にやってきた働き蜂.
14. アオドウガネ *Anomala albopilosa*：昭和区八事本町興正寺, 15. VIII. 2004. アジサイの葉を食害する集団.

1



2



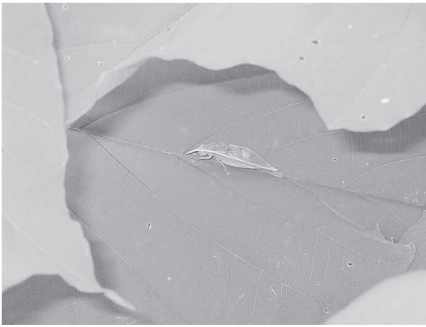
3



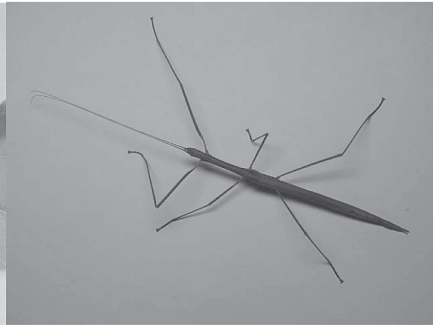
4



5



6



7



8



名古屋東山周辺の昆虫相

9



10



11



12



13



14

